

# パブリック・コメントの意見の概要と市の見解

対象案件 「和光市自殺対策計画(案)」

実施期間 平成30年2月1日(木)～2月20日(火)

意見数 1名4件

「市の考え方の区分」

◎:意見を反映し案を修正した    ○:意見を一部反映し、案を修正した    △:案を修正しなかった。    □:その他(感想、この案件以外への意見等)

No.	意見の概要	市の考え方	区分
1	<p>(意見) 警視庁がここ近年発表する年間の自殺者数は、二万数千人と表示されるが、事実上の数値データは年間10万人を超える自殺者数であることを、本件素案に追記願いたい。</p> <p>(理由) 国家公安委員会が平成27年度に発表している全国県警の死体取扱い総数は、年間16万2千881人です。この内訳として、犯罪死体は、488人、変死体は、2万211人、その他の死体は、14万2千182人(警察庁が例年公表する自殺者数も含む、但し、交通関係と東日本大震災による死因死体は含まれない)以上のデータから、正式に認定されない自殺者もこのデータの中に含まれる可能性も強いだけに、数字上に現れない実態としての自殺者数は相当に多いと見るべきである。然るに、警視庁が近年発表する年間・二万数千人の自殺者数は、あくまでも表向きの数値であることも市民へ啓発することで、本件テーマの深刻さを市民へ強く啓発することとなる。これにより、より多くの市民から、事の重大性を認識させ、自殺対策の明案を引き出せる効果を生む。</p>	<p>ご指摘のように、警察の死体取扱数中には、犯罪による死体以外が約16～17万体制あり、その中には自殺か否かが不明なものも含まれているものの、具体的な割合の予測は困難なため、その部分の数値の計上は控えますが、実数はさらに多いと推測できる旨を、計画書2ページに記載いたします。</p>	○
2	<p>(意見) 自殺の危険性も秘める引きこもりの全国規模数値を当計画案に表記していただきたい。</p> <p>(理由) 引きこもりの数としては、平成27年度15歳から39歳の若者を対象にした調査、内閣府推計全国54万人が重要な参考数値となろう。されど、この数字は自己申告制の調査票が元になる。あくまでも、内閣府が一部特定地域の調査数結果を元にはじき出した予測数値の54万人であるだけに、実態はこれ以上の更なる上澄み数値が予測できる。しかも、内閣府が調査年齢層を49歳までの年齢層に拡大していれば、100万人以上の数値にも成り得よう。いずれにしろ、事の重大性を市民に認識させるためにも、何らかの数値表記は必要である。</p>	<p>ご指摘のように、引きこもりは、自殺のリスクのひとつとされております。「若者の生活に関する調査報告書」(平成28年9月)(内閣府)から、15歳以上39歳以下の引きこもり状態にある人は、全国の推計数は、約54万人で、その推計割合を和光市の人口に当てはめて推計したところ約450人となります。この数値を計画書27ページに記載いたします。</p>	◎

## 「市の考え方の区分」

◎:意見を反映し案を修正した    ○:意見を一部反映し、案を修正した    △:案を修正しなかった。    □:その他(感想、この案件以外への意見等)

No.	意見の概要	市の考え方	区分
3	<p>(意見) 自殺の危険性がある方の緊急避難対策のみの施策だけではなく、一般健常者にも警笛を鳴らす自殺対策の予防策にも強く取り組む覚悟なるものも当計画案で宣言していただきたい。それには、一般市民による自殺回避策の経験談を語るイベント企画も具体案にすべきである。</p> <p>(理由) 自殺要因の動機付けとなる要因は、肉体的損傷による苦痛、経済的苦境、職場や学校での人間関係の悩みとストレスから来る鬱病や精神疾患、そして失恋による精神的苦痛等が上げられる。たとえ、現在は一般健常者の方でも、それらの自殺要因の悪化状況に、将来置かれるリスクは抱えていよう。上記パターン別に健常者が突然に厳しい苦境に置かれた際、どのように乗り切るかは日頃からシュミレーションしておく必要がある。正にこれこそが自殺対策の予防となる。具体的な予防策となれば、心理学系の学者もお手上げ状態だ。然るに、「私はこうして苦境を乗り越え、自殺を回避した」という市民の体験談を主流とする企画イベントも当計画案での目玉とすべきである。</p>	<p>①計画書31ページの自殺予防のための取組「不安や悩みに対する相談窓口の充実と周知」等において、すでに各領域で行っている施策のほか、市ホームページ等もさらに活用して、広く啓発等をはかっていきます。</p> <p>②市民参加等の事業については、現在実施の想定はしていませんが、今後事業検討の際のご意見として参考にさせていただきます。</p>	△
4	<p>(意見) 自殺の要因となる失恋問題の予防策も重要課題とした上で、当問題の具体的な予防策を提示できる独創的なボランティア講師を首都圏近郊から発掘する当計画案にして下さい。</p> <p>(理由) 恋愛の効用を提唱する心理学系の学者等は数多く存在するも、失恋のケアや失恋打開の具体案を提示する専門家は極めて皆無と言ってもよい。恋愛とは失恋のリスクを抱えるだけに、恋愛のすばらしさのみを提唱する考え方は、ある意味無責任とも言える。失恋とは、ある日突然やって来るだけに始末が悪い。現に、恋い焦がれる女性を殺した後に自殺するストーカー事件も少なからず近年に起きる始末である。恋にはそれだけの魔力と恐怖がある。また、昨今、神奈川県座間市で発生した女子校生による自殺サイト投稿事件も失恋要因による自暴自棄も投稿への動機となっている。以上の複数事件から判断しても、失恋要因を少しでも緩和する羅針盤無くして、恋愛の航海をすることは余りにも危険であることが理解できる。それだけに、失恋の免疫を各市民に植え付ける施策として、中学生から失恋問題に真摯に取り組ませるための上記意見案が不可欠となる。</p>	<p>①失恋はリスクのひとつとして、認識しておりますが、失恋を重要課題とした取組は行いません。</p> <p>②失恋問題を要因とする自殺の予防のための独創的ボランティア講師の活用については、現在実施の想定はしていませんが、今後事業の検討の際のご意見として参考にさせていただきます。</p>	△